

幼稚園における防災対策の現状

—九州地区の取組を中心に—

生 見 朗 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園]

Report on the disaster prevention measures in kindergarten : Focusing on practices in Kyusyu area

NUKUMI Akira

キーワード：「自分の命は自分で守る」「正しく畏れ、正しく備える」、防災マニュアル、避難訓練、不便さの体験、備蓄

1. 問題の所在

昨年3月7日から四日間、本学の地域防災教育研究センターの事業に参加して岩手県宮古市・山田町を視察する機会を得た。正に東日本大震災の発生からちょうど3年目にあたる。

被災された方々との交流で最も心に残ったのは、「とにかく逃げること」「(被災地と被災住民を)忘れないでほしい」という言葉だった。



未曾有の被害をもたらした3.11東日本大震災が発生して4年近くが過ぎた。

2万を超える死者(震災関連死を含む)・行方不明者などの甚大な被害、未だ廃炉に向けて見通しがたない福島第一原子力発電所事故などは、復興復旧を阻む重い足かせとなっている。

一方、この震災を大きな教訓として、南海トラフ地震など今後想定される巨大地震等の発生に備えて十分な準備を早急に進めなければならない。特に、学校教育において幼稚園児は、最も非力な“命”であり、社会全体で守らなければならない存在である。

東日本大震災の被災地から遠く離れた地にある九州は、震災に対する意識が薄いと言われている。しかし、九州には、東岸のすぐ近くまで南海トラフの南端が伸びており、阿蘇山をはじめ桜島や雲仙普賢岳、霧島新燃岳など多くの活火山が存在し、火山活動による地震も多い。また、近年だけでなく、歴史的にも大きな地震や火山噴火による被害が記録されており、決して震災と無縁ではない。

東日本大震災後、九州地区の各附属幼稚園でも、それぞれの実情に合わせて防災減災について地道な取組を少しずつ進めてきた。決して目立った取組ではないが、慢性的な予算不足の中で大学・学部や関係機関と連携しながら、防災減災に取り組んでいる。その方向性を探るために最近の九州地区における国立大学法人の附属幼稚園の取組についてまとめた。

また、九州地区の実践例の一つとして本園の取組についても具体的にふれてみたい。

2. 平成25年度九州国立大学附属学校連盟(九附連)副園長会アンケート結果より

平成24年度・25年度(計画を含む)の2カ年の取組について、「1 マニュアル等の見直し」「2 避難訓練等の改善」「3 防災グッズ購入・備蓄の推進」「4 保護者や関係機関等との連携」の4項目で質問し(平成25年9月実施)、その結果を次ページのようにまとめた。また、詳細については必要に応じて電話による聞き取りも行い、結果の考察などの参考にした。

九 附 連 幼 稚 園 部 会 に よ る 防 災 減 災 へ の 取 組 ～ 安全安心な幼稚園づくりをめざして ～

年 度 園 名	平成24年度(成果と課題)				平成25年度(計画と進捗状況)			
	1 マニキュアルの等の 見直し ・見直しのための資料 収集(見直し作業中)	2 避難訓練等の改善 ・引渡訓練の実施へ	3 防災グッズ購入・ 備蓄の推進 ・水と食料(全園児分)	4 保護者や関係機関 等との連携 ・引渡訓練の計画、実 施への協力	1 マニキュアルの等の 見直し ・見直しのための資料収 集	2 訓練訓練等の改善 ・引渡訓練の実施	3 防災グッズ購入・ 備蓄の推進 ・水と食料の定期的な 入れ替え	4 保護者や関係機関 等との連携 ・引渡訓練の実施
A	・各種マニキュアルは年 度初めの職員会議で 毎年見直ししている。	・地震の訓練時の避難 場所のために園庭に 時々〇「地震の丸」 をかくようになった	・園舎全面改修が決ま ったために備蓄して いない。	・有友会が日本赤十字 社から講師を呼んで ワークショップをし た。	・毎年見直す。	・仮園舎で行う、場所 に応じた訓練をする 。	・園舎改修後、備蓄部 屋を作り、そこに用 意する予定。	・備蓄用品は有友会と 相談しながら用意す る予定。
B	・避難訓練(園舎)にお ける1次避難場所の設 定と避難訓練の実 施	・年に3回(地震・不 審者・火災)	・水(500ml缶)、カン パン、食料、衣類、ラ ンタンなど ・緊急カラス飛散防止フ ィルム	・引渡訓練(消防署と の連携)	・見直しのための資料 収集(平成24年度) ・見直し作業に着手	・避難訓練(園舎)にお ける2次避難場所設 定(園)	・水(2リ)とカンパン(1 缶)を30人分を購 入、簡易防寒具(7名 用)100人分購 入	・引渡への協力
C	・H23年度に作成し た「幼児の安全確保 管理マニキュアル」の 見直しと実施(園議)	・防災ずきんを着用し た避難訓練の実施(通 常時)	・防災ずきん購入 ・防災リュック整備 ・大学より配給された 水、食料等の保管	・引渡訓練(消防署と の連携)	・H24作成危機管理 マニキュアルの見直し	・避難訓練と引渡訓練 を同時に連動して実 施	・四校園備蓄倉庫設置 計画案(3月以降)	・引渡訓練改善 ・災害時の約束
D	・H23年度に作成し た「幼児の安全確保 管理マニキュアル」の 見直しと実施(園議)	・防災ずきんを着用し た避難訓練の実施(通 常時)	・防災ずきん購入 ・防災リュック整備 ・大学より配給された 水、食料等の保管	・引渡訓練(消防署と の連携)	・H24作成危機管理 マニキュアルの見直し	・避難訓練と引渡訓練 を同時に連動して実 施	・四校園備蓄倉庫設置 計画案(3月以降)	・引渡訓練改善 ・災害時の約束
E	・H23年度に作成し た「幼児の安全確保 管理マニキュアル」の 見直しと実施(園議)	・防災ずきんを着用し た避難訓練の実施(通 常時)	・防災ずきん購入 ・防災リュック整備 ・大学より配給された 水、食料等の保管	・引渡訓練(消防署と の連携)	・H24作成危機管理 マニキュアルの見直し	・避難訓練と引渡訓練 を同時に連動して実 施	・四校園備蓄倉庫設置 計画案(3月以降)	・引渡訓練改善 ・災害時の約束
F	・H23年度に作成し た「幼児の安全確保 管理マニキュアル」の 見直しと実施(園議)	・防災ずきんを着用し た避難訓練の実施(通 常時)	・防災ずきん購入 ・防災リュック整備 ・大学より配給された 水、食料等の保管	・引渡訓練(消防署と の連携)	・H24作成危機管理 マニキュアルの見直し	・避難訓練と引渡訓練 を同時に連動して実 施	・四校園備蓄倉庫設置 計画案(3月以降)	・引渡訓練改善 ・災害時の約束
G	・H23年度に作成し た「幼児の安全確保 管理マニキュアル」の 見直しと実施(園議)	・防災ずきんを着用し た避難訓練の実施(通 常時)	・防災ずきん購入 ・防災リュック整備 ・大学より配給された 水、食料等の保管	・引渡訓練(消防署と の連携)	・H24作成危機管理 マニキュアルの見直し	・避難訓練と引渡訓練 を同時に連動して実 施	・四校園備蓄倉庫設置 計画案(3月以降)	・引渡訓練改善 ・災害時の約束

3. 現状分析

調査結果や電話聞き取りから次のようなことが明らかになった。

(1) マニュアルの見直し

- ア ほとんどの園で見直しに着手している。
 - 地震・津波に関わる事項の挿入や補足
 - 毎年、年度始め・年度末に見直し
- イ 大会・研修会等で情報交換したり、先進園視察を実施したりしている。

(2) 避難訓練等の改善

- ア 二次避難場所の決定、避難経路の決定・整備を行っている。
- イ 引渡訓練の実施・改善を行っている（PTAとの連携）。
- ウ 研修の充実を図っている（職員、PTA）。

(3) 防災グッズの購入、備蓄の推進

- ア 水（2ℓ、500ml）と食料（乾パン）等の備蓄を進めている。
- イ 懐中電灯や携帯ラジオ、ポータブルテレビ、アルミ保温シート等の備蓄の検討・推進を行っている。
- ウ 防災ずきん（園児用）やヘルメット（職員用）の購入をしている園もある。
- エ ガラス飛散防止シートや家具転倒防止グッズ等を購入し、園舎内で活用を進めている。

(4) 保護者や関係機関との連携

- ア 防災減災についてPTA等との協力を行っている。
 - 引渡訓練、親子キャンプ・教育講演会、防災リュック自作
 - 備蓄用品の提供（家庭で不要なものを提供）
 - 防災倉庫設置への援助受け入れ
- イ 附属学校間の連携が進みつつある。
 - 二次避難場所として附小屋上の一角を確保、合同避難訓練の協議
- ウ 学部・大学との連携が進みつつある。
 - 食料・水の提供
 - 合同備蓄倉庫（附属学校園）の設置
 - 学部教員との共同研究の取組

4. 本園の取組（本年度の取組も含む）

(1) 毎日の保育の中で「自然や命にふれる」

「科学的な眼を育てる」

本園の広い園庭、そこに息づく草花や虫、鳥たちは宝である。自然とのふれあいを通して「なぜ、なに」を大切にし、一緒に観察したり、調べたりして科学的な思考の芽生えを促すよう言葉掛けをしている。



←お庭になっていた桃だよ、おいしそう。

あれ、逆さまに見えるよ（水玉レンズ）

また、園外保育等でも同様に配慮している。

自然や命に
ふれる

…芋の苗植え・芋掘り・焼き芋、
田植え・稲刈り・脱穀・精米
・おにぎりパーティ 等

科学的な眼
を育てる

…動物園見学、市立科学館見学
等

観察力と判断力の育成は重要である。

(2) PTAとの連携協力

- ア 年3回行うPTA教育講演会のうち1回を活用して日本赤十字社を講師とするAED実技、最近の幼児事故と対処法について毎年実施し、被災時の救急救命にも備えている。また、職員も毎年、AED実技を研修している。



AED実技を組み込んだ救急救命法を体験（PTA）

- イ 避難訓練における引渡訓練への協力、緊急連絡システム（携帯電話による連絡、安

否確認)への協力をいただいている。

ウ PTAで実施する親子キャンプで、避難所生活を想定して親子で屋外炊飯やテント宿泊を体験している(ここ2年はディキャンプ)。特に昨年度からは、ハイゼックス炊飯袋を使った炊飯を実演し、本年度は試食も行って好評を得た。

○ 傘袋の1/3程度の長さのハイゼックス高密度ポリエチレンの袋に洗米を入れて密封し、沸騰した湯の中に入れて30分程度煮ると御飯が炊き上がった。



屋外で不便さを体験することも大切



ハイゼックス炊飯袋で炊いたご飯を試食



○ 親子キャンプに参加した保護者のアンケート結果は次の通りである。(防災関係の自由記述のみ)

- ・ 副園長先生の災害の説明や非常食の体験はありがたかったです。
- ・ 防災用のお米の使用方法も勉強できた上、自然を満喫できて一石二鳥だった。
- ・ 副園長先生のサバイバル術の学習は大変ためになり、ありがたい情報を頂き、感謝しています。
- ・ 副園長先生が説明してくださったご飯の炊き方など勉強になりました。
- ・ 今回のレクレーション企画や副園長先生の災害時も使えるアイディアなどコラボい

いですね。

- ・ レクレーションや副園長先生の炊飯袋での実演は連携が取れておらず、ちょっとグダグダした感じを受けた。打ち合わせがもっと必要なのでは?でも災害時に必要な炊飯袋の実演はとても良かったです。
- ・ 先生方の災害時の炊飯の方法や実際に試食できた事はとても貴重な経験でした。家でも子どもと一緒に炊飯してみたいと思います。
- ・ 防災にちなんだ話は子どもはもちろん保護者も大変ためになった。
- ・ 副園長先生の防災体験のお米炊きでご飯を試食したりして、普段とは違う体験ができて良かった。
- ・ 副園長先生の防災に関するお話も大変ためになり防災について考えるいいきっかけになった。
- ・ 外の蒸し暑さや虫の事など、親である私がまず慣れていなくて不自由、不便さを感じる事もありましたが、アウトドア活動が防災活動へつながる事に気づかされ、親子でもっとこのような機会を持ちたいと思いました。
- ・ 副園長先生のお米を炊く様子がキャンプらしくよかったです。災害時の炊き方を教えてもらい、とても勉強になりました。ぜひ子ども達と一緒にやってみようと思います。
- ・ 災害時のご飯の作り方は皆さんが経験できたらよかったのでは?

~~~~~ 波線は筆者

### (3) 附属学校間の連携

ア 備蓄や避難訓練等について情報交換を行っている。特に、隣接する附属小学校とは避難訓練の際の二次避難場所として屋上を開放していただくとともに、本園の避難訓練実施においても協力をいただいている。

また、防災マニュアルや備蓄(水や食料、保管方法)についてお互いの現状について話し合っている。





無事に二次避難場所の附小屋上に移動



避難訓練後、引渡カードで確認して園児を引き渡す

#### (4) 学部・大学との連携協力

ア 緊急時心理支援分科会との連携協力を深める。

○ 年3回、四附属学校園の担当が集まり、具体的な事件・事故を想定した対応を各校園の実態に合わせて時系列にまとめ、専門の学部教員の指導助言を受けながらお互いの対応の在り方について検討等を行っている。また、一連の対応における緊急時心理支援（園児・教職員へのカウンセリング等）の在り方についても検討している。研修した内容を全職員に周知し、実践に役立てられるようにしている。

イ 学部教員との共同研究を活用する。

○ 「安全安心な幼稚園づくりをめざして」というテーマで専門の学部教員（教育臨床、住居学）と協力しながら研究を進めており、これまでの3年間、下表のとおり先進園研修視察を実施した（各写真の説明文の（ ）内は被災時の避難方法）。

また、資料や啓発用図書の収集等も行っている。

| 年   | 訪 問 先                         |
|-----|-------------------------------|
| 2 4 | 桜井幼稚園・さくらんぼ園(高知市) あたご幼稚園(高知市) |
| 2 5 | 香良洲幼稚園(津市) 出雲幼稚園(津市)          |
| 2 6 | 第一幼稚園(東京都) 片貝幼稚園(九十九里町)       |



認定こども園桜井幼稚園・さくらんぼ園  
(近くの新堀小へ避難)



学校法人 あたご幼稚園  
(木造階段を登って屋上へ避難)



津市立 香良洲幼稚園  
(隣接する作業所3階屋上へ避難)



津市立 雲出幼稚園  
(隣接の雲出小屋上へ、次に高茶屋小へ)



文京区立 第一幼稚園  
(近くの誠之小へ避難)



九十九里町立 片貝幼稚園  
(近くの中央公民館へ避難)

ウ 鹿児島大学地域防災教育研究センターとの連携を深める。

○ 2011年(平成23年)6月に、「災害の実態把握と仕組みの解明、予測、防災教育、災害応急対応、災害復旧復興等の諸課題に全学的に取り組む態勢を構築する。」という目的で当センターが設置され、私(副園長)も教育部門のメンバーとして参加している。学内の、防災に関係する様々な専門家(教員)が学部の枠を越えて参集し、地域と連携しながら調査研究や防災教育の推進を図っている。地震や火山、医学、放射線など各学部から寄せられる専門的知識にふれながら防災への総合的な知見を深め、今後とも実践に生かしていきたい。

○ 昨年度から講義「命と地域を守る防災学」(共通教育での防災科目)の一コマを担当し、本園における防災教育についてささやかな取組と課題等を紹介する機会をいただいている。当センターとの連携を深め、その成果を本園の保育実践の中に生かすことはとても重要である。

○ 冒頭でもふれたように、震災発生から3年となる時期に、当センターの事業に参加し岩手県宮古市・山田町へ研修視察に参加する機会を得た。四日間、じっくりと被災地の現状を見て、被災された方々の話を聞くことができた。この視察で得たことを園児や保護者、職員に伝えていくとともに、これからの実践のバックボーンにしていきたい。



山田町の堤防、津波の後、町は猛火に包まれた



校庭に建てられた仮設住宅(宮古市)

#### (5) その他の実践

○ 園外保育等で園舎を離れる際は、目的地までの歩行の一部を避難と想定して、規律正しく整然と歩く指導をしている。また、今回購入したトランシーバーや大型メガホン等も園外に出る場合や、運動会等でも積極的に活用し、職員が操作に十分慣れるようにしている。さらに、公共施設等を活用する場合は、防災に関する展示コーナーなどを園児や職員に進んで体験するようにさせている。



鹿児島市立科学館で地震体験(強風体験にも挑戦)

○ 幼稚園ではお誕生会を毎月開く。本園では友達と保護者が一緒に誕生日を祝うのであるが、「産んでくれてありがとう」(感謝)、「生まれてくれてありがとう」(感動)を十分に味わうとともに、『いのちの尊さ』を感じてもらう大切な行事である。

○ 関東大震災や阪神・淡路大震災、東日本大震災、本県で発生した大災害の日の前後で、防災について「自分の命は自分で守る」「正しく畏れて正しく備える」を園児なりに理

解し実践できるように支援している。



親子で参加し、園全体でお誕生を喜ぶ



防災の日にちなんだ、防災ずきんをみんなで着用

- 動植物を園内で育てることを通して、“命の尊さ”について体感させている。



←葉っぱに  
何かいるよ？

ウサギさん、→  
サラダだよ！



- 年度当初の家庭訪問が終わった段階で、各担任が地図（鹿児島市内の園区）に園児一人一人の居住地について丸シールを張ってもらった。シールは3クラスごとに色違い（年少は赤、年中は青、年中は黄）であり、シールには出席番号を記入し、名簿で園児を確認している。緊急時の登降園等につい

て配慮する資料としている。



居住地シールを張った鹿児島市の地図（一部を拡大）

- 基本的なことではあるが、転倒防止のために金具を使った固定、伸縮棒の活用を行っている。



金具による書棚の固定

#### （5）備 蓄

厳しい予算状況が続いている中、購入計画を立て予算執行を進めるとともに、次年度予算策定に向けて計画的に要求したり、PTAの理解・協力を求める啓発等を進めることが大切である

ア 水・食料（3日分の備蓄が目標）

水 …500ml×96本

2ℓ×192本

食料…乾パン110g缶入り×96缶

アルファ米50食分×2箱

缶入りパン（50g2個入り）×

96缶

イ 防災グッズ（主なもの）

- ・ AED 1台
- ・ 担架 1台
- ・ トランシーバー 4台
- ・ カセットコンロ 1台

- ・ 防災グッズ（園長室用） 1セット
  - ・ 防災ずきん（園児用） 96個
  - ・ ヘルメット（職員用） 10個
  - ・ 非常用アルミ保温シート100枚
  - ・ アルミリヤカー 1台
- ウ 図書等
- ・ 園児用
  - ・ 保護者・教師用
- \* 下の写真を参照

〈主な備蓄等〉



園長室に保管している非常食



ヘルメットと防災ずきん



AED（幼児用キー付属）



防災グッズ（セット）



非常用持ち出し袋（トランシーバー、ファイル等）



担保（平常時はベンチとして利用）



図書等（園児用、保護者・職員用）



大型絵本



防災カルタ

## 5. 考察と提言

九州地区の国立大学法人の附属幼稚園における取組全般についてまとめてみる。

（1）危機管理マニュアルの見直しとともに、引渡訓練を取り入れるなど避難訓練の充実改善が見られる。

これからも各園の実態に即しながら、地域との連携を具体的に取り込んだり、定期的な避難訓練だけでなく抜き打ち訓練を加えるなど回数増を図ったり、様々な活動の場（時間帯）で実施したりすることが大切である。

特に地震の際は、「机の下に隠れる」「物が

倒れたり落ちたりしない場所で頭を隠す姿勢をして伏せる（ダンゴムシのポーズ）」「窓ガラスや水槽から離れる」など徹底させ、園児なりに「自分の命は自分で守る」という態度を身に付けさせなければならない。そのためには、その取組について保護者に十分理解してもらうとともに、被災した場合の園と保護者の動きについては予め取り決めを行い、確実に共通理解を図っておく必要がある。（震度5弱以上の場合は、園児は幼稚園で保護し、余震等が収まり交通の安全が確認された段階で保護者の迎えをお願いしておく。等）

(2) 慢性的な予算不足の中での食料・水、防災グッズの備蓄状況は、各園の実情により様々であるが、取組は少しずつ進んでいる。また、保護者に防災グッズを家庭の不要品の中から寄贈してもらったり、防災リュック（園児用、着替え・防寒具・食料・水を収納）自作などしてもらったりした園もある。その他にも、備蓄倉庫などを後援会等の支援で設置してもらったが、その後の園舎改築等で移設を余儀なくされたという例もあった。収納する部屋の確保や倉庫設置も含めて、防災グッズの購入、水・食料の備蓄については多くの予算が伴う事項であるので、学部や大学、同窓会・後援会とも十分な理解と協力を得てから進め、せつかくの準備が無駄にならないように進める必要がある。

(3) 保護者や関係機関との連携については(2)でもふれたが、防災減災についての園の取組を確実に理解してもらうことが第一である。

その上で、引渡訓練の準備で引き渡しカード（園児引き取りに来園できる人の名前と連絡先、家族で決めている避難場所等を記入）を作成したり、実際に訓練に参加したり、備蓄品としての不要品を提供したり、防災リュックを自作したり等に関わってもらうことを通して防災意識を高め、家族でも話題にしようことが大切である。

また、学部・大学はもちろん学部内の附属学校園同士の連携が大切である。被災するときは附属学校園の子供たちは同じであろうし、避難したり、待機したりする際も一緒に行動することが多いと思われる。附属学校園が同じベクトルで避難訓練や防災教育を進め、合同で予算要求等も行う必要がある。

附属学校園は広範囲から子どもが集まり、公立学校園とは違って地域との連携が取りにくい面があるが、被災した際は、お互いの協力がなければ災害を乗り越えられない。特に幼児を抱える幼稚園はなおさら地域の協力が必要である。かねてから幼稚園の開放を進め、必要があれば、お互いの会合や研修等に積極的に参加できるよう態勢を整えておきたい。

## 6. おわりに

共同研究として実施したアンケート調査（県内の国公立・私立幼稚園を対象に本年度8月実施）の中の項目「防災推進のための目標や方針が幼稚園教育目標・経営方針等に具体的に示されているか」について、約3分の1の幼稚園が“いいえ”と答えている。異常気象の影響もあって、自然災害が多発し、多大の被害が発生している現在において、誠に残念である。このままでは、安全・安心な育ちの場としての幼稚園は、その役割を果たすことができない。

物心両面で甚大な被害をもたらした東日本大震災は、私たちに防災減災や防災教育の重要性を再認識させる契機となった。被災地を訪れる前は、幼稚園で実践を進めようとするとき、「被災された方々と地域と接したことがないのに、本当に役立つ実践を進めることができるのか。」と自問することがあった。被災地の思いや希望を確実に受け継がなければ、子供たちや保護者に“命の尊さ”や「自分の命は自分で守る」という意識は育めないと感じたのである。

広島市の土砂災害をはじめ本年度も全国各地で大規模な自然災害が発生している。様々な自然災害で被災された方々の思いと、被災地の現状をしっかりと胸に刻み、確実に子供たちに伝えながら、今後の実践の基盤にしていきたい。

かつてポンペイを壊滅させたヴェスヴィオス火山をナポリ市民はこよなく愛している。同様に、鹿児島市民も桜島を真から愛し、その存在は“心のふるさと”そのものである。だからこそ、桜島を含む大自然を「正しく畏れ、正しく備える」必要がある。そして、その基本となるのが「自分の命は自分で守る」なのである。日本の未来を創る園児たちと視線を同じにして今後も防災に取り組んできたい。

## 【文献】

文部科学省（2013） 学校防災のための参考資料  
「生きる力」を育む防災教育の展開

